

膜と層の解剖にこだわった

# ロボット 大腸癌手術

監修

長谷川 傑

福岡大学医学部 消化器外科

へるす出版

|                                   |     |
|-----------------------------------|-----|
| 序文                                | 1   |
| 1 盲腸癌に対する回盲部切除                    | 2   |
| 松本 芳子 他（福岡大学医学部 消化器外科）            |     |
| 2 肝彎曲部癌に対する結腸右半切除                 | 14  |
| 野村 明成 （大阪赤十字病院 消化器外科）             |     |
| 3 横行結腸癌に対する横行結腸切除                 | 32  |
| 塩見 明生 （静岡県立静岡がんセンター 大腸外科）         |     |
| 4 脾彎曲部結腸癌に対する結腸切除                 | 40  |
| 横田 満 （倉敷中央病院 外科）                  |     |
| 5 下行結腸癌に対する結腸左半切除                 | 54  |
| 高橋 広城 他（名古屋市立大学大学院医学研究科 消化器外科学）   |     |
| 6 S 状結腸癌に対する S 状結腸切除              | 66  |
| 尾崎 公輔 他（がん研究会有明病院 消化器センター 大腸外科）   |     |
| 7 上部直腸癌に対する低位前方切除術                | 74  |
| 加藤 岳晴 他（国立がん研究センター中央病院 大腸外科）      |     |
| 8 下部直腸肛門管癌に対する括約筋間直腸切除術と腹会陰式直腸切断術 | 86  |
| 竹中 雄輝 他（東京科学大学 消化管外科学分野）          |     |
| 9 側方リンパ節郭清                        | 100 |
| 小竹 優範 他（厚生連高岡病院 外科・消化器外科・乳腺外科）    |     |
| 10 T4b 直腸癌に対する他臓器合併切除             | 122 |
| 植村 守 （大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座 消化器外科学） |     |
| 11 潰瘍性大腸炎に対する大腸全摘術・IPAA           | 132 |
| 品川 貴秀 他（東京大学医学部 腫瘍外科）             |     |
| 12 ロボットを用いた体内吻合                   | 140 |
| 森 至弘 他（関西医科大学 下部消化管外科学講座）         |     |

# 序 文

近年、ロボット支援手術の普及は目覚ましく、大腸癌手術の領域においても、その導入施設数は急速に拡大しています。手術支援ロボットがもつ高精細な三次元視野と多関節鉗子の自由度は、従来の腹腔鏡下手術では困難であった繊細な操作を可能とし、外科医に新たな技術的地平をもたらしてくれました。しかしながら、ロボット支援手術の真価を最大限に引き出すためには、機器の習熟のみならず、手術解剖の深い理解が不可欠であることはいうまでもありません。

大腸癌手術において、良好な腫瘍学的成績と安全性を両立させるための核心は、解剖にあります。胚発生に基づく解剖学的癒合筋膜の同定、正確な層間剥離、そして血管根部リンパ節郭清——これらを確実に遂行することが、根治性と低侵襲性を同時に追求するうえでの絶対条件となります。手術支援ロボットの卓越した光学系と拡大視野は、この膜・層解剖の精緻な実践において、まさにその真骨頂を発揮してくれます。

本書の企画にあたり、私が強くこだわったのはまさにその点で、技術の解説にとどまらず、「なぜその層を剥くのか」「その膜の向こうに何があるのか」という解剖学的思考の根幹を、読者の皆様と共有したいと考えていました。そのためには、日々、臨床の最前線でロボット大腸癌手術を牽引されている先生方の知識と経験を結集することが、何より必要でした。

幸いにも、国内屈指の先進施設において、ロボット支援手術を精力的に推進されている先生方に、執筆をお願いすることができました。ご多忙のなか、本書のコンセプトにご賛同いただき、それぞれの施設における豊富な症例経験と卓越した解剖学的知見をご提供くださった諸先生方に、心より感謝申し上げます。各章に込められた「術者の思考」と「解剖へのこだわり」は、本書の最大の強みです。

本書が、ロボット大腸癌手術を志す若い外科医にとっては確かな道標となり、すでに一定の経験を積まれた先生方にとっては、ご自身の手技を見つめ直す契機となれば幸いです。手術室における一つひとつの判断が、患者の命と予後に直結する以上、私たち外科医は解剖の知識を update しつづければなりません。本書がその営みの一助となり、本邦のロボット大腸癌手術のさらなる発展と、患者の利益につながるならば、編者としてこれに勝る喜びはありません。

末筆ながら、本書の刊行にご尽力いただいたへるす出版の皆様にも、深く感謝申し上げます。

2026 年 6 月

福岡大学医学部 消化器外科

長谷川 傑